HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国語臨海方言の記述的研究 ： ヴォイス・アスペクト体系を中心に［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	根岸, 美聡
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第13389号
Issue Date	2018-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72632
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Misato_Negishi_review.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：根岸美聡

審査委員

主査	准教授	飯　田　真　紀
副査	教授	大　野　公　裕
副査	教授	清　水　賢　一　郎
副査	名誉教授	佐　藤　俊　一

学位論文題名

中国語臨海方言の記述的研究
――ヴォイス・アスペクト体系を中心に

本論文は、中国浙江省の臨海市で用いられている中国語方言について、音韻体系、文法体系の全体像を提示した上で、ヴォイスやアスペクトについて特に重点的に記述を施し、方言類型論的観点を交えつつ考察を加えたものである。

臨海方言は、中国語方言分類では呉方言(江蘇省・上海市・浙江省一帯に分布)に属し、さらにそのうちの南部呉方言に分類される方言である。呉方言は語順や前置詞の発達度といった文法的基準から見ても標準中国語とは大きく異なり、類型論的に重要な位置付けの方言である。しかし、北部呉方言については上海方言など比較的研究が進んだ方言があるが、南部呉方言については本論文のような体系的記述研究が待たれていた。

本論文の成果は以下の通りである。

第二章では音韻体系を概説した。特に、従来明らかにされていなかった連読変調（tone sandhi)について初めて体系的に整理した。その結果、類型的には、最終音節の声調だけが保たれて先行音節の対立が中和されるか声調交替を起こすタイプ（「最終音節優勢型」（岩田 1994：194））に属すとの指摘を行った。

第三章では語順に関する特色を述べた後、文成分、品詞体系、各種構文に分けて文法概説を行った。標準中国語との異同に留意しつつ、臨海方言の文法的特徴を浮かび上がらせた。

第四章では受動構文、使役構文、処置構文といったヴォイス構文を取り上げた。形態論的類型としては孤立語タイプに属す中国語方言では、ヴォイスは動作者や被動作者を表す名詞句の位置転換とそれらの名詞句への介詞（前置詞・後置詞・周置詞の上位概念）の付加によって表し分けられる。臨海方言では、受動構文と使役構文に関して、同一の構文で複数の介詞が使い分けられる現象が見られるため、その

差異を論じた。また、同方言では、授与動詞に由来する介詞“拨”が、使役構文の動作者、処置構文の処置対象を導くのに兼用されるなど多機能性を見せる。そこで、授与動詞から各機能への通時的変化過程の推定を試みた。

第五章ではアスペクトを取り上げた。臨海方言には「将然」「開始」「起動」「持続」「進行」「継続」「実現」「経験」「終結」「出来事の発生」を表し分ける形式が備わっており、各形式の統語的特徴、意味的特徴について詳細な記述を行った。中でも、標準中国語に見られない開始相（「～しつつある」）を担う形式の存在を指摘し、「今まさに」＋「～したい」という形態素の組み合わせからの文法化の可能性を述べた。また、実現相については標準中国語と異なり２つの形式による機能分担が見られ、その使い分けには結果状態や影響の残存の有無という意味的特徴が関与的との主張を行った。

本論文は、従来まとまった記述のなかった臨海方言について、母語話者インフォーマントに対して丹念な聞き取り調査を行い、音韻体系と文法体系の全体像を記述・提示したこと自体に大きな価値を有する。付録として、中国語方言調査では定番の同音字表（同音の漢字をまとめた表）や文法例文一覧といった基礎資料も掲載されており、同方言の音韻・文法体系について知識を得ようとする際に利用できる。

このように、本論文は言語記述として高い資料的価値を有するだけでなく、ヴォイスやアスペクトという一般性の高い文法現象を掘り下げて考察しており、個別方言研究や方言類型論への波及効果も期待できる。特に、臨海方言のように授与動詞由来の形式が様々な意味役割表示に兼用されるようになる多機能化は、多くの方言、さらには中国語以外の言語でも見られるものの、臨海方言では従来中国語方言について知られていた類型とは別種の拡張パターンを見せることが指摘され、ヴォイス構文の類型論的考察に新たな展開をもたらす可能性を持つ。

本論文は以上のような成果を持つ反面、口頭試問及び審査委員会では、用語が不統一で厳密さに欠けるなどの問題点も指摘された。また、授与動詞の機能拡張を跡付ける推定の根拠が必ずしも明確でない点は改善が必要である。ほかにも、先行研究の成果を本論文の考察においてどのような形で継承し、乗り越えたのかが十分明確でない点も指摘された。最後に、臨海方言の分析結果が中国語研究や一般言語学研究に対して成し得る示唆を、全般的にもう少し踏み込んで提示してもよかったのではないかとの意見も出された。

しかしながら、丹念な調査・分析を積み重ねた結果、随所で興味深い言語事実が発掘されており、今後、多方面での研究の深化の可能性を大いに秘めている。そうした意味でも本論文の意義は大きい。

よって、審査委員会では博士（学術）学位の授与に値するものとして、本論文を合格と判断した。